

書評 Andrei Lankov, From Stalin to Kim II Sung: The Formation of North Korea 1945-1960

| | |
|-----|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 著者 | 河原地 英武 |
| 権利 | Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp |
| 雑誌名 | アジア経済 |
| 巻 | 44 |
| 号 | 4 |
| ページ | 70-73 |
| 発行年 | 2003-04 |
| 出版者 | 日本貿易振興会アジア経済研究所 |
| URL | http://doi.org/10.20561/00041551 |

Andrei Lankov,

*From Stalin to Kim Il
Sung: The Formation of
North Korea 1945-1960.*

London : Hurst & Company, 2002,
xvii+202pp.

かわらじひでたけ
河原地英武

朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮と略す）の拉致問題や核開発に現れた異常な体質や理不尽な諸政策については、テレビや新聞の報道を通じて、我々日本国民にあまねく知られるようになった。街の書店にも、同国の実情を伝える新刊書が、それぞれ雨後のたけのこのように次々と現れている。もっとも、その大半は、時事解説や内情レポート風の刊行物であって、専門家による本格的な研究書はあまり多いとは言えない。

本書も昨年（2002年）出たばかりの新刊書だが、時局的な事柄は扱っていない。主として論じられているのは、北朝鮮が建国される1940年代後半から、金日成が独裁的な権力基盤を固める1950年代後半までの約10年間である。その意味では、現今の金正日政権の性格を知るうえで直接役に立つ本ではないかもしれない。しかし、「世界に現存する最後のスターリン主義体制国家である北朝鮮」が、「なぜ今も生き延びているのかを理解するためには、その政治体制がいかに形成されたか見る必要がある」（カバーに記された文言より）。父子2代にわたって権力を独占し、恒常的な臨戦体制のもとで国民に経済的犠牲を強い続ける国家に、明るい前途は期待できない。しかし、それがにわかには破綻する兆しが見えないのも事実だ。本書は、このパラドキシカルな北朝鮮国

家の構造を、歴史的に遡及しつつ分析しようとした意欲作である。

著者はまだ若い研究者のようだ。履歴によれば、旧ソ連国立レニングラード大学でPhDを取得し、1989～92年まで同大学で教鞭をとっていた。現在は、オーストラリア国立大学アジア朝鮮センターの講師である。また、1984～85年には、交換留学生として北朝鮮で勉強したそうだ。過去の業績について触れておけば、1990～94年、ロシア（ソ連）の学術誌に北朝鮮の歴史に関する論文を発表し、95年にそれらをまとめ、『北朝鮮——過去と現在——』と題するロシア語の著書を公刊した（それは朝鮮語にも訳されたという）。本書はこの前著を土台にしているが、新しい資料を取り入れて加筆訂正し、また、現在のことは省いて歴史的 content に限ったとのことである。

ソ連の崩壊後、ロシアではソ連時代の公文書が大量に公開された。その中にはソ朝関係（特に朝鮮戦争）に関する文書も多数含まれている。本書にも、それらが積極的に盛り込まれていることは言うまでもない。わけでも在北朝鮮ソ連大使館やソ連外務省、そしてソ連共産党中央委員会国際部が作成した公文書や、1940年代後半のソ連共産党政治局における諸決議などが有効に活用されている。著者はまた、北朝鮮建国に関与した元ソ連人顧問や、ソ連へ亡命した北朝鮮の元高官に対してインタビューを行い、その貴重な証言を本書で紹介している。さらに、ロシア語、英語、朝鮮語の語学力を駆使して、先行研究の成果を踏まえていることも高く評価してよい。

ただし、本書が対象とする時期に関しては、依然としてさまざまな資料的制約もあるようだ。例えば、1945～48年に北朝鮮で占領行政を行ったソ連軍の諸機関や民政部の活動については、いまだに多くの文書が非公開であるという。同時期の金日成の役割にも不明な点が多い。とはいえ、今日のロシアが北朝鮮の国益を尊重しようとする以上、こうした制約が解除されることは当然の間なさそうである。

本書は、以下のような章立てとなっている。

- 第1章 1945～48年の北朝鮮——ソ連軍の占領と
新国家の誕生——
- 第2章 金日成伝の試論
- 第3章 1940年代と50年代の北朝鮮指導部内の派
閥
- 第4章 1945～55年の北朝鮮におけるソ連派の台
頭
- 第5章 許嘉誼——朝鮮労働党の忘れられた創設
者——
- 第6章 8月の危機
- 結 語

ソ連軍の占領行政を扱った第1章は、本書の中で最も多くのページを割かれ、全体の4分の1を占めている。北朝鮮の政治経済を復興するために、ソ連軍司令部内に民政部が設置されたが、それを監督したのはテレンチイ・シティコフ大将であった。彼は北朝鮮建国後にソ連大使に任命され、スターリンの信頼も厚く、金日成に大きな影響力を有し、朝鮮戦争の開始に深くかかわった人物だが、今までその経歴は詳らかでなかった。本書では公文書に基づき、それが明らかにされているので、まず紹介しておきたい。

シティコフは1907年、農家に生れた。1929年、レニングラードの工場労働者として入党し、38年にはレニングラード地区党委員会第一書記に任命されて、同委員会第一書記であったアンドレイ・ジダーノフの信頼を得た。ジダーノフは1930年から党中央委員であり、39年に政治局員となってスターリンの有力な側近の一人と目されるようになったが、そのジダーノフの庇護を受けたことが、シティコフの急速な出世と結び付いているようだ。ただし、彼らが1930年代後半にレニングラードで大々的な粛清を行い、それを昇進の足がかりにしたことも確かであった。1945年当時、シティコフは第1極東方面軍の政治委員で、軍の階級は大将だった。ソ連軍内の政治委員で大将にまでなったのは、彼のほかに3名しかいなかったという。初代の駐北朝鮮ソ連大使となったが、朝鮮戦争における不首尾の責任を問われ、1950年11月に解任された。1951年2月には中将に降格され、

モスクワから数百キロ離れたカルーガ州行政府の副議長に任じられた。1950年代後半に駐ハンガリー大使となったが、64年にレニングラードで死去したとのことである。

ところで、ソ連軍が進駐してきた当初、北朝鮮では共産主義勢力が微弱であったと著者は指摘する。1925年に設立された朝鮮共産党は、28年には事実上消滅し、それ以後、共産主義者たちは主として南朝鮮で地下活動を行っていた。1945年当時、共産主義運動はむしろ米軍が統治する南朝鮮において遥かに活発だったのである。ソ連の進駐軍は、北朝鮮の民族主義者たちを味方につけて占領行政を敷かざるを得なかった。すなわち彼らの自発的な政治活動を認めつつ、さまざまな有力者を糾合する一方で、できるだけ親ソの勢力の立場を強めようと努めたのであった。

ソ連軍当局が金日成を指導者に据えようと考えたのは1945年9月のことらしい。ただし、それは入念に構想された決定ではなく、第2章で詳述されているように、いくつかの偶然が重なった結果であった。それ以後、ソ連は着々と共産主義勢力の強化を図り、共産党と新民党を合併させ、1946年8月には北朝鮮労働党の創設をもたらしたのである。このように他党を合併して共産主義政党を強化する手法は、東欧諸国でも見られたが、北朝鮮で先鞭をつけられたと著者は述べている。1948年4月には、平壤で朝鮮統一政府を創立するための会議（南北朝鮮政党・社会団体代表者連席会議が開かれたが、それはソ連当局者の指示に基づいてのことであった。同年10月、共和国の樹立が宣言され、金日成は直ちにソ連に対して国交を求める書簡を送ったが、それもソ連側の指示に従ったものであることが、公文書によって跡付けられている。

第2章では、金日成が最高指導者の地位に就くまでの過程が考察されているが、その中で興味深い論点をいくつか挙げておきたい。抗日戦争当時、金日成の武勇伝は伝説的な色彩を帯びて民衆の間に広がっていた。ところが1945年に大衆の面前に現れた彼は意外に若かったため（当時33歳だった）、英雄の名を騙る偽者説が流布した。著者は資料を引きつつ、

金日成が1930年代の英雄その人であったと推断している。しかし、ソ連が当初から彼を朝鮮の指導者として遇していたのでなかったことも指摘している。金日成は1945年9月初頭にスターリンと会い、指導者として認知されたとの説があるが、その当時、ソ連軍の一少佐に過ぎなかった彼が、スターリンと面談するチャンスは有り得なかったと著者は断じている。金日成自身、一時はソ連軍の高級将校になることを考え、北朝鮮の最高指導者になろうとの野心は希薄だったという。彼の栄光には少なからぬ偶然が作用していたわけである。

第3章では、北朝鮮指導部における派閥対立の問題が論じられている。1940年代半ば、指導部には次の4つの派閥が存在した。国内派、延安派、ソ連派、そして金日成の属するパルチザン派である。この中でパルチザン派は最も弱小であったが、朝鮮戦争と中ソ対立を通して、金日成は順々に他の派閥の力を殺いでいった。1950年代後半にまず国内派が消滅し、57年初頭には延安派に対する粛清が行われた。ついでソ連派も駆逐され、こうして1960年代にはパルチザン派による全権掌握が完成したのである。金日成は自身の親族とパルチザン派の子弟を重用し、彼らの支配体制の永續化を図ったが、それが今日の金正日政権にも引き継がれているのだ。

第4章では派閥の中のソ連派にスポットが当てられている。彼ら朝鮮系のソ連人は、ソ連当局によって北朝鮮に派遣され、1945～60年にさまざまな指導的地位に就き、北朝鮮国家の形成において極めて重要な役割を果たしたのであった。初期には軍属として通訳の任にあたる者が多かったが、次いで派遣された人々は各種の教師や顧問として働き、警察や治安の部局などに配置された。だが、彼らの活躍した期間は15年程度で終わり、朝鮮戦争以後、ソ連の北朝鮮に対する影響力が低下すると、ソ連への帰国を余儀なくされるか、粛清されて、政治的な影響力を完全に失った。

第5章は、ソ連派随一の指導者であり朝鮮労働党副委員長であった許嘉誼（ロシア名アレクセイ・イワノヴィッチ・ヘガイ）の評伝にあてられている。ヘガイは1908年にハバロフスクで生まれ、ソ連極東

地域の党指導者として頭角を現した。1933年に中央ロシアに移り、30年代後半の大粛清を生き延びて党歴を重ねた。1945年秋に北朝鮮へ派遣されると、朝鮮系ソ連人としては例外的に素早く政権の中枢に就いて、朝鮮労働党の設立に大きな役割を果たした。だがやがて、金日成との権力闘争に敗れ、失意の内に自殺したとされるが、著者はいくつかの理由を挙げて他殺説を有力視している。許嘉誼に関するまとまった先行研究は乏しいと思われるだけに、主として彼を知る人々（実の娘を含む）の証言に基づいて記された本章は、先駆的な業績と見なし得る。

第6章は第1章に次いで多くのページが割かれ、1956年8月末の党中央委員会総会で金日成を打倒する企てがなされ、挫折した経緯が詳述されている。この一件に関しては、ロシアにおいても公文書が公開されておらず、いまだに不明な点が多々あるとのことだが、著者はさまざまな文献を渉猟して、できる限り具体的な叙述を目指している。

これを企てたのは、当時の金日成が自身への個人崇拜を助長し、縁故主義に基づく政権の強化を推し進めていたことに反発する勢力であった。ただしその国際的背景には、ソ連におけるフルシチョフのスターリン批判や、中国における百花斉放・百家争鳴のキャンペーンがあったことに留意せねばならない。すなわち金日成打倒の企ては、北朝鮮における突発的な事件というよりも、その時代の社会主義諸国に共通した、体制刷新の動きの一環であった。現にこの企てに参加した人々は、ソ連や中国の当局者と緊密な連絡を取り合い、指示やアドバイスを受けていたことが本章に記されている。

この企てが失敗した理由として、第1に、金日成がいち早く異変を察知して事前に危機回避の策をめぐらせたこと、第2に、一般民衆があくまで金日成への支持を堅持したこと、第3に、党内の中堅幹部が謀反に同調しなかったことが挙げられるという。第2については、朝鮮は東欧諸国などと異なり、民主主義的な伝統が乏しいため、民衆の間に個人崇拜への反発があまりなかったことを理由に挙げる。また、一般民衆にとっては、ソ連や中国といった外国の思想や制度よりも、金日成がアピールしたような

土着的な政治手法（例えば「主体思想」など）や伝統的な家父長制の方が、より馴染みやすかったのだと著者は指摘する。第3については、朝鮮ではさまざまな政争を、単なる個人の権力欲や私利私欲に基づく私的抗争と見なす傾向が強く、従って、その政争によって何ら恩恵を得ることのない中堅幹部は、金日成に反対する人々に対して概して冷淡だった由である。だが、反金日成派によるこの企ては、決して非合法的クーデターなどではなく、あくまで法的手順を踏んだ合法的行為であり、その趣旨も社会主義の本義に戻ろうとする真摯なものであったことに、著者は一定の評価を与えているようだ。

北朝鮮は現代世界における最も不可解な国家のひとつであるが、著者は本書で、その不可解さのよって来たる原因を、建国当時にまで遡って探っている。そして、まず第1に、スターリン主義体制がこの国家の根幹を成していること、第2に、派閥抗争の中で着実に力を強めていった金日成がソ連や中国の影響力をできる限り排し、朝鮮の伝統的な支配形態を取り入れて民衆の支持を固めていったことを実証的に跡付けている。

論旨の大筋は、徐大肅（ハワイ大学朝鮮問題研究所長）をはじめとする学者の先行研究に多くを負っており、必ずしも独創的とは言えない面もある。しかし著者は、主としてロシアの公文書や生き証人たちへのインタビューを情報源として、いくつもの新

事実を本書に盛り込んでいる。

ロシア出身の研究者という利点を生かし、ソ連の東欧諸国に対する政策への言及がしばしば見られるのも本書の特徴だろう。すなわち本書では、北朝鮮と東欧諸国におけるスターリン主義の受容の相違といった比較政治学的なアプローチも試みられている。その意味では、単に朝鮮問題の専門家のみならず、社会主義体制や権威主義体制の諸問題に関心を持つ研究者にとっても有益な著書と思われる。

文献リスト

< 日本語文献 >

- 桜井浩編 1990. 『解放と革命——朝鮮民主主義人民共和国の成立過程——』 研究双書390 アジア経済研究所.
- 鐸木昌之 1992. 『東アジアの国家と社会3 北朝鮮——社会主義と伝統の共鳴——』 東京大学出版会.
- 和田春樹 1992. 『金日成と満州抗日戦争』 平凡社.
- 小此木政夫・徐大肅監修 1998. 『資料 北朝鮮研究 政治・思想』 慶應義塾大学出版会.

< 英語文献 >

- Suh, Dae-Shook 1988. *Kim Il Sung: The North Korean Leader*. New York: Columbia University Press. (邦訳は林茂訳『金日成』御茶の水書房 1992年).

(京都産業大学外国語学部教授)